
Stand by Killer

3000/10/4

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Stand by Killer

【Nコード】

N0853S

【作者名】

3000/10/4

【あらすじ】

ここは異能と呼ばれる者たちが住む世界
十三階建てのパンドラアパートに住む青年、尾張晴辰くおわりはるときは偽善者と呼ばれている。

日々の平穏を愛する彼は、その身に課せられた呪いを行使し、保護活動と称し日や人助けをしていた。

そんなある日、国家機密組織の重役であり、晴辰の昔の知人である駸射苓亮くまだらい れいすけくからとある仕事を依頼される。

それは一人の少女との同棲生活だった。

意気揚々と与えられた一軒家に向かう晴辰。

しかしそこに待っていたのは、世界一の探偵でありながら最強最悪の殺人鬼でもある早神織花くさがみ おりはなゝの姿だった。

仕事を受け付けてしまった以上キャンセルするわけにもいかず、はめられたと思いながらも、晴辰は織花と一緒に暮らしていた。

そんなある日、二人が暮らしている一軒家にクール便で荷物が届けられる。

心当たりはなく、送り主不明の荷物にを不審に思いながらも晴辰と織花は荷物をあける。

そこに入っていたのは一通の手紙。

そして、バラバラにされたの死体。

手紙には『おとなしく投降しろ。さもなければ次は貴様たちがこうなる』と書かれてあった

こうして 『偽善者』尾張晴辰と『殺人鬼探偵』早神織花との共同戦線が張り巡らされていく。

雨の日、暗闇の館にて

「はあ、はあ、はあ……」

バシャン。

また一つ、水溜りを踏みつけてしまう。跳ね上げた水飛沫が革靴の中に入り、不快極まりないものとなっている。大粒の雨が肌を打ちつけ濡らす。それはスーツも同じで、水を吸い重くなっている。

ただ、今はそんなことはどうでもいい。とにかく急がなければならぬ。間に合わなければならぬ。この足を止めることは許されない。

昨夜から降り続く雨は、一日の三分の二を過ぎようとしているのに、もかかわらず、晴れ渡る気配を一切見せない。どんより曇った空から際限なく水玉を落とし続けている。

ズキリ

「うっ」

先ほど痛めた左足首が軋む。やはり、車の運転などという普段まったく行わないことはすべきではない。無免許運転である上に、そもそも免許証を取れる年齢に達してすらいない。ここに来るまでに何度も事故まがいの行為をしたことか。バンパーは無残にも潰れ、フロントガラスをはじめとする防弾使用の窓ガラスは全て木っ端微塵になった。車体のあちこちに傷やへこみを作った拳句、とどめに大きな岩に正面衝突。あわや爆発するところだった。下手をすれば免許を永久に取得出来ないかもしれない。

口の中も切ってしまったらしい。鉄の味がじわりとを支配口腔内していく。赤い唾を吐き捨て、どうにかその感覚を減らそうと努力する。

目眩も、あるにはあるのだが、無視する。そうでもしないと、この足は止まってしまう。それだけは避けなければならない。

「頼むから、彼女だけは、殺さないでくれ」

自分を奮い立たせるために何か喋ろうとして、自然と出たのがこのセリフだった。

ずっと前から、嫌な予感は薄々感じていた。何かが起こる気がした。だけど、確信はなかった。

この不安に向き合わないようにしていた。無いものにしようとしていた。だけどそれは、ただズルズルと問題を先延ばしにしていたに過ぎなかった。その不安が、今日本当になろうとは思ってもよらなかった。

「いや、今日だから、か」

仕事は非番で、普段なかなか取れない睡眠時間を一日でどうにかしようと、昼まで寝て、起きてからも、何をするわけでもなくボーっと過ごしていた。

異変は、一本の同僚からの電話。

『お前の監視対象が消えた』

その瞬間、俺の中に、モヤモヤと浮かんでいた不安が一点に終結し、形をなした。

ただの勘でしかないが、ただの思い込みでしかないのかもしれないが、はつきりといえることは、この手の直感、当たってしまうのが、セオリーだ。

痛い足を引きずり、痛む腹部を右手で抑え、走る。

ようやく見えた、巨大な屋敷。

とある少女が監禁されている、通称暗闇屋敷。遠めに見ても、駐在しているはずの監視員が見当たらない。おそらく、彼女の手によるものだろう。近づくにつれて、その詳細が眼に飛び込んでくる。皆、気絶しているかのように、目を閉じ倒れている。気絶している、というのはあくまで見た目的なものだ。実際は。

「死んでる……な、全員」

首筋に手を添えるが、何の反応も返ってこない。初めからわかりきっていること。ただし、外傷は一切ない。刃物による傷もない。銃で撃たれたわけでもない。生きていたままの人間がただの肉塊に

なつてここにある。まるで、魂だけを抜き取られてしまっているかのように。血と骨と肉でできた精巧なる人形。

「……綺麗だ」

これほどまでに完璧なる死体を作り出すなんて。だからこそ、彼女は、この世で最も恐れられ忌避されている。

そして、ここにはこの世で最も醜悪な死体を作り出すあの人が収められている。

何の因果か、今日彼女たちは出会ってしまった。

それはきつと、俺のせいではないのだろう。

「だったら、阻止するのも、俺の、役目、だ」

俺の体は、どうも長距離走にはむいていないらしかった。息も絶え絶えで、動悸も激しい。しかし、息が整うのを待つてはいられない。汗と雨でぬれている額をスーツの袖でぬぐうと、重厚な扉をゆっくりと開いた。

冷たく重く張り裂けそうな空気が俺の体を包み込んだ。八月の真夏日だと言うのに、この場所だけ、異質な空気を作り出している。

濡れた身体にこの空気は相性が悪い。だけど、それを気にしてられるほど、今の俺は冷静じゃない。屋敷の中は名前のとおり、真っ暗だ。それもそのはず。この屋敷は、彼女が何も見ないようにする為に作られた場所だ。光という光を殺すため電気さえも通っていない。厚いカーテンで全ての窓は日の光を遮られ、まさに暗闇。明かりはたった今開け放った扉から入る、雨模様の空をわずかに通り抜ける日の光のみだ。薄暗く、屋敷の中を照らす。

暗いからといって、どこに何があるかなんて、俺には手に取るように分かるのだが。

「おい！いるんだろ、一織花くくおりはな>>！」

返事はない。やはり、部屋に向かうしかないようだ。

階段まで足を引きずりながら歩く。先ほどよりも、痛みが鮮明になってきて、歩くことがままならない。ましてや階段に登るなんてことは、さらに困難を極めた。

「ちっ」

舌打ちをした。みっともなく手摺にしがみ付きながら。上を目指す。一步踏み出せば、ズキリ。そこに心臓があるかのように脈を打ち、熱を帯びている。

一步一步が遅く、それにまた苛立ちを感じる。十五段全てを上り終えるのに五分もかかってしまった。

後はまっすぐ伸びる廊下。

そこで、物音一つ。

ドサツ、という、音。

まるで、何かが崩れ落ちたような音。豪雨が屋根を叩き、雷鳴が轟いている中、なぜだか、その音ははつきりと耳に飛び込んでくる。心臓が高鳴る。

俺の中でロジックが最悪のシナリオを完成したかのように。

哀しいレクイエムが、鳴り響く。

「――」

脚の痛みなど関係なかった。

最後の忌々しいほど長い廊下を駆け抜け、目的の最奥の部屋。ノックもせず、扉を乱暴に開け放った。

「あら、遅かったわね」

ベッドの上。織花は、いつもの表情で俺を出迎えた。

平然とした、顔で。

ベッドに押し付けるように彼女の首に手にかけてながら。白い手袋をはめたままの手で。

「なにを………やっているんだ、君は」

「………これ？見て解からない？」

殺しているのよ。

楽しそうに。いや、実際楽しんでいるのだろう。彼女、一早神織花くくさがみおりはな>>は微笑んだ。こいつには、楽しくないことなどない。仕事しかり、殺人しかり。何をやろうと、笑っていら

俺と違い、いつだって世界を楽しめる彼女。そんなお前は、今、何に手をかけている？

「私としては、ずいぶんと待ったつもりなのだけれど」
ようやく、首から手を離れた。

ここからでは、その顔を見ることはできない。

「こんなふうにな人を殺すのは初めてなのよね。だから、加減がわからなくて」

ずっと首を絞め続けたわ、と彼女は言う。

その背後にいるのは、誰？

「そこをどけろ。織花」

俺は、目の前にいる織花を睨みつけた。

「嫌よ」

返事は、それ一言のみだった。

「どけると言っている。俺は彼女を蘇生する義務がある」

一歩近づいた。

二歩近づいた。

織花の手には、刃渡りの短いナイフ。その切っ先が俺に向けられていた。睨めつける刃が微動だにしない様子は、織花が本気である事を示しているようだった。

「近づかないで」

織花の顔から、笑みは消え去っていた。そこには、それこそ世界中を騒がす殺人鬼にふさわしき顔があった。

恐ろしいまでに冷えきった、無の表情。この部屋の空気とあいまって俺を脅しつけた。

この俺が、死を恐れている？

「彼女はまだ助ける事が出来る。そうすれば、お前だって殺人未遂で終わらせる。俺はこれ以上事を荒立てる気はない。だから」

織花の威圧感に負けぬよう、腹から声を出す。さもないければ、声が恐怖で裏返ったことだろう。俺は今ほど、この人を恐れたことがあっただろうか？

「だから、なに？あなたはこの娘にキスでもしようというの？」

「馬鹿な事を言うな。人工呼吸に決まっているだろうが。早くしないと間に合わなく――」

「だったら、」

織花は俺の言葉など、聞いている様子もなく、ただ、淡々と語る。

「なおさら、だめ」

無から、有へ。

次に表れた表情は、また笑み。

それも、飛び切りの。艶かしいほどに妖しく、美しい。それでいてキレている。手にしているナイフなど、無に等しい。こちらを見据えるように。俺に見せ付けるように。

「私は、あなたがこの娘に近づくことを許さない」

口元に手を添え、彼女は言う。

何がおかしくて、笑っていられる？

.....

（ああ、）

そのとき俺は気付いてしまっていた。

（もうだめだ）

これが己の限界であると。

（こんなのが結末だと？）

この場所に立ち尽くしていることの無意味さを。

「もう。無理だ」

つぶやくように、囁くように俺は言う。

誰に向けるわけでもなく、ただ、心の奥地から染み出した本音を、ありのままを漏らした。

「これ以上、俺は、お前には耐えられない」

スーツの内ポケットに手をもっていく。手にそれを握った感覚がズシリと伝わってくる。硬く優しくないその触り心地は、今の俺の心境を表しているかのようにだった。

「さようならだ、だ」

これを外してしまうつもりはなかった。元アメリカ軍正式採用拳銃、ガバメント。これから放たれる凶弾が、織花の額を貫くようにかまえる。織花との距離は四、五メートル。射撃の練習は今までサボっていたけど、これは外すほうが無理だ。

「ふん。あなたもそんな無粋なものに手を染めるのね」

織花はそれを、まるで薄汚い物でも見るかのように一蔑くくさげす>>んだ。

「言つたろうが。もう耐えられないんだよ！」

俺の、たった一つしかなかった大切なものをお前は、奪っていった。ようやくつかみ取る事ができそうだった幸せを、初めて知った快楽を、喜びを消し去った。もう二度と、味わう事のない。お前は、俺の目の前で、潰した。

「織花。確かに、お前の隣には俺しか立つことはできない。だけど！」

「だけど。」

壊れてしまった俺の心を、癒してくれたのは、そこにいる彼女。永遠に続くことを恨み、絶望する俺に希望を与えてくれたのはそこで眠っているはずの彼女ただ一人だ。

「彼女だけが、俺の傍にいて言ってくれた」

そして、俺自身が、彼女といっしょでありたいと願った。互いに支えあうと誓った。それがたとえ、弱々しい、軟弱な支柱だったとしても、何度だって立て直すつもりでいた。それが俺の決意だった。生きる、目的だった。

「それを、お前が奪うと言うのなら、俺は、お前を見捨てる。見限る。この意味がわからないお前じゃないだろう」

彼女を見捨てる。すなわち、俺はこの恐ろしき殺人鬼を世に放つと言う意味だ。世界がこんな事態を黙って見ているはずがない。

「ええ、重々承知よ」

ようやく、織花はベッドから立ち上がった。ゆっくりと僕に近づ

いてきた。手にナイフを持ったまま。拳銃で作った線の結界をものともせず。

ほんの一瞬、身体が強張った。俺に向かって左手が使えないとはいえ、彼女は平気で人を殺してしまうような鬼だ。俺に死はなくても、痛みは存在する。

だが、俺の警戒も、杞憂に終わる事をこの時点では忘れていた。彼女は、流血を最も嫌っていることを。久しぶりに感じた怒りを持って余している俺は、見失っていた。

早神織花を。

「んん？」

カラン

彼女の手からナイフが落ちる。

織花の顔は今までで最も近くにあった。

織花の両手が俺の顔に添えられ、やけに柔らかな唇が強引に重ねられた。普段まったく化粧をしないのにもかかわらず、潤い艶やかな彼女の唇。ほのかに漂う甘い香が鼻腔をくすぐる。優しい手は暖かく俺を包む。目を閉じられていては、目蓋の奥にあるはずの瞳を覗くことができない。

突然のことに驚き、深い罪の意識に苛まれる。だけど、振り解くことができない。

体中がこの禁忌に、悦に入っている。そんな、気がした。

スツと、唇が離される。それでも、手は添えられたまま。

至近距離で、見詰め合う。頭一つ低い織花の顔。思わず、見とれそうになる。彼女の瞳の中に俺がいるのは、不思議だった。

織花は俺を見ている。

これが何を示しているのかは、今の俺には皆目見当もつかない。それからどれほどだったのか。それともいうまでたっていないのだろうか。

「さようなら」

それまで俺の両頬を押さえていた手が離された。それなのにあま

りの出来事に脳が芯まで麻痺し反応しきれなかった。

織花が立ち去る。

捕まえなければと、頭では思っているのに、身体が動かない。麻痺が治らない。ようやく動いてみるもあまりにも鈍く、振り向いたときにはすでに織花の姿はなかった。

扉は開けられたまま。誰もいない虚ろな廊下が、俺の心を蝕む。急に力が抜け、その場にへたり込んでしまった。

「あ、ああ」

言葉も発することができない。痺れが全身を駆け巡る。右手にはだらしなく握られたガバメント。過去に何百何千と人を一葬くくほうむくくってきたはずのこの凶器も、俺には勇気すら与えてくれなかった。せせら笑うかのように黒光りするそれを、力なく床に叩きつける。

そういえば、彼女は怎么样了？

立ち上がる、が、それも今の状態ではかなわない。どんなに力を入れても、途中で崩れ落ち、無様に床で肩や頬を打つ。

「ぐうう……」

仕方なく床を這い、ベッドに近づいた。

雷が、少しだけできたカーテンの隙間から暗い部屋に明かりをもたらした。

そこには、

美しいと言うには、あまりにも、残酷な死が存在した。

鬱血して醜くなった彼女の顔。静かに閉じられた瞳。そこに俺の姿が映ることはもう、ない。

「うわああああー」

俺は彼女を抱くことしかできなかった。

悲しい叫びが、暗き館にこだまする。

雨は、雷は、それを打ち消してはくれなかった。

今日という呪の日を喜んでいるのだろう。

「はあっ！」

声と共に俺は夢の中から解放される。

するとそこは、明るい、狭い部屋が待っていた。

「あー、夢オチですか……」

布団の中からの状況説明。

俺の名前は、尾張晴時だ。

この場所は四年間のアメリカ生活から日本に帰国後、三年間過ごし見慣れた部屋。十三階建てのなんとも不吉な数字を残すアパートの七階。その中のひとつの部屋。俺の家。

身体を起こして、冷静になる。自分の格好を見てみると、シャツにジーンズ。昨日帰ってから着替えもせずに寝てしまっていたらしい。そりゃ、悪い夢も見ろだろう。

今まで見ていた夢の内容について考える。気分が泥沼の中へと沈んでいく。

また、未練がましく俺は。

「おっと、スマイルスマイル」

起きてそうそう気分が沈みかけるのをどうにか阻止した。手を顔に持っていていき、無理やり口角を上げる。グイっと。

そんな自分の姿を想像し、おかしくなってきた。

よし、テンションは上昇した。

布団から出る。布団をたたんだ。更なる気分転換を図るため服を着替えることなく、玄関から外に出てみた。

風が吹き抜ける。

サンダルをペタペタ鳴らし、廊下の端までいく。そこから、朝日が見える。眩しいこの光は、あの日の出来事をほんの少しだけ霞ませてくれている。そんな気がした。

「ん？」

下のほうがやけに騒がしかった。身を乗り出し見てみると、なにやら警察の方々が大勢やってきていた。きつと上の住人に用があるのだろう。それがこのアパートの法則だ。八階から上は、過去に罪

を犯し、警察組織から逃げ回っている人間が多く住んでいる。周りの建物よりも、少し高いこのアパート。また隣接するビルは間隔が狭い。うまくやれば、屋上伝いに逃げられるという寸法らしい。

パンドラアパートの朝は今日もにぎやかに始まったみたいだ。

ガチャン。

後方で、扉が閉まる音がする。振り返ってみると、そこにはゴシツクロリータな寝巻きに身を包んだかわいらしい少女、もとい美少女がこちらに向かって歩いてきていた。

その手には、口に×印をつけた熊のぬいぐるみ。その上、目の換わりか、左右色の違うボタンがさらに不気味さを際立たせている。

『おはようございます。偽善者のお兄様』

そう喋ったのは彼女ではなく、熊のほう。無機質な音で発せられた。

「うん、おはよう黒子ちゃん。今日もいい朝だね」

『はい』

この娘の名前は、雛葉黒雪という。歳は十一歳。身長は百三十センチで俺の胸の位置より少し低い場所に頭がある。パンドラアパートで今のところ一番新しい住人。三ヶ月ほど前、とある仕事を請け負ったときに会った少女。紆余曲折あり、ただ今このパンドラアパートに住むようになる。狂人多いこのアパートで唯一目の保養となる稀有な人物なのだ。ただカワイイだけではなく、その年に似つかわしくない、もの静かな雰囲気を持ちえ、見た目よりも大人っぽい。また、早くから騒がしいですね』

「それがこのアパートの良いところであり、悪いところだからなー」生活していて困る事は多々あっても、飽きる事は決してない。入ってくる人も出て行く人もたくさんいるけど、残る人はかなり長く暮らしているみたいだし。

「ここでの生活には慣れた？」

『はい、おかげさまで』

と、黒子ちゃん（俺がこう呼んでいるのは、常に真っ黒い格好を

しているのです。本人にはこのことを言っていない）は静かに、小さなお辞儀をした。

やっぱり、躰がいいとこんな感じに子供は育つのか。俺の両親は放任主義だったので、ここに失敗作ひとつあるわけだが。人間、やはり生まれが大切であることを実感せざるをえない。

『そういえばお兄様。昨日からどうもうきうきしているように見えますが、何かよいことでもあったのですか』

喋り方にも、それが影響している。今頃黒子ちゃんと同じような年代は、昨日を昨日と言わないと思う。

「うきうきしてた、俺？」

『心なしか』

うーん。うきうきというまでもないけど。確かに浮かれてはいたかもしれない。

「あのね、今日古い友人に久しぶりに会うことになってさ、多分そのせいだろ」

『……お兄様のお歳で古い友人はないと思いますが。まるで壮年の男性みたいな発言です』

くまのぬいぐるみは、口元をもごもご動かしながら、そう音を出した。黒子ちゃんのツツコミ。

「まあ、古いはいいすぎたかもしれないけど、昔には変わらないね。俺がアメリカへ行くまでの付き合いだし」

約六年間の付き合い。そして会うのは四年ぶりになる。いろいろとお世話になったし、迷惑をかけた。俺の、一番可愛くなかった時代を最もよく知る人物だ。

「十九年生きた内、六年を締めているから、結構長い付き合いなんだ。積もる話もあるしね」

「その昔のお知り合いというのは、女性ですか」

それまで眠たそうだった黒子ちゃんの表情が一変。まるで百戦錬磨の魔女のような顔つきになる。

「い、いや男だよ、男。駁射苓亮っていう名前の嫌なやつで」

そういったとたん、黒子ちゃんの顔から剣呑な雰囲気は消え去った。

まさか、十一歳の少女にたじろいでしまうとは。さすが、魔女の家系で生まれ育った事はある。きつと、彼女の中に流れている血が、そういった雰囲気の出し方を教えてくれているのだろう。

「きつと、黒子ちゃんには一生関係することのない人だと思うよ。というか、あんな人と会わせたりでもしたら、きつと僕は成瀬さんの怒りを買うことになりそうだから遠慮しておいてね」

成瀬さん。フルネームは筒浪成瀬。俺達が住んでいる七階の一つ下に住んでいる女性。六階の住人。六階の住人というのは、六階の一部屋に住んでいるという意味ではなく、文字通り、六階自体に住んでいるのだ。ワンフロア四部屋のこのアパート。そのうちの全てを借りている筒浪さんは、ここの住民でも屈指の変人として近所でも有名な人。普段何をやっているのかはまったく不明で、出会ったびに彼女の好きな野球の話を延々聞くことになる。

「お兄様や成瀬さんに言われなくとも、私はそんな人と会う気はありません」

ま、それもそうだろう。この子は俺の見てきた人たちの中でも、かなり人見知りをするタイプだ。初めて会った時だって、何度殺されそうになったことか。

「いつごろお帰りになるのですか」

「んーどうかな。むこうはかなり多忙な人だし、思いのほかすぐに終わってしまうかも。実を言うとこれ、仕事の話。だからきつと、話を通したらどこかに行っちゃうだろうな」

スケジュールに縛られて生きている人間の鏡みたいな人だからな。俺が日本に帰ってきたことも知っていただろうに。三年もたってから連絡をしてくるということは、きつと彼が一番嫌いな『予定外』が起きているのだろう。

「その仕事というのは、安全なのでしょうか」

黒子ちゃんは、心配そうな顔をした。熊ぬいぐるみも、心なしか

悲しい音を出した気がする。今の黒子ちゃんには、人見知りだった頃の剣呑さを俺には向けてこない。むしろ、今のように優しさを見せてくれるのだった。

「俺に回ってくる仕事はたいてい危険だから、きつとその希望には副えないと思う。それに、そろそろ前回の仕事の失敗が響いてくる頃だから、請けないわけにもいかないんだよね」

安定感のない仕事をしているが故の障害だ。それを承知で俺はやつている。

黒子ちゃんの顔に、ますます陰りが見える。その原因は俺だというのが心苦しい。

なんてことだ！俺はこんないけな美少女に心配をかけさせてしまうなんて。こんな事を成瀬さんに知られたら、考えるだけゾツとしない。

というわけで、言い訳。というか彼女をなだめる事にした。

「心配しないでいいよ。多少は怪我をするかもしれないけど、俺は不死身だぜ？ちゃんと帰ってくるに決まっているだろう」

『はい。でも……』

間が空く。

『気をつけてくださいね』

優しい微笑を俺に見せる黒子ちゃん。少女でありながら、魔女でありながら、まるで聖母のように。

それを踏みにじる勇氣は、俺にはない。説得に成功したとはいえないが、黒子ちゃんを心配させないようにしよう。

「ああ、きつとその約束に応えてみせるよ」

『お兄様の言葉を信じます。では、失礼します』

そう言つて、自室に戻っていくのだった。

その後姿を見送ると、俺も部屋に戻った。準備が整い次第、懐かしき友人のもとに出向くでしょう

世界には、二つの人種がいる。

一つは、言ってしまうばただの人。

そこら中に歩いていてる人。一般人。

今このファミレスないにも多数いるであろう一般人がそう。

昼時なので、人の出入りは盛んで、それに今日は日曜という絶好な外出日和だ。人であふれかえっている。

集団でキャラキャラと笑っている女の子達。お父さんとお母さん、それに小さな子供という、見ていてほほえましい家族。スーツを着て、ケータイを片手に忙しそうに食事を取るサラリーマン。さっきから悪い空気を周囲に散布しまくるカップルらしき男女。

ここにいる全ての人が、普通の人だろう。確証はないが。まあきつと。それは、どこにだっていてる人。どんなな大富豪だって、どんな貧乏人だって。豊かな才能に満ち溢れている人も、愚かな人間も含まれる、何も持っていない人たちのことを指している。

で、もう一つの人種というのは、口にするのも恥ずかしいこと極まりないのだが、存在しまうのだから仕方がない。

異能の力を持つ者だ。

限られた、極わずかな人のみに宿る不思議な力。それは、世間では超能力といわれているものだけでなく、理解しがたい力の持ち主だっている。

いままで、何人かの異能者を見てきたけど、その力は人それぞれで、似ているものはあっても、同じものは存在しなかった。

今朝の雛葉黒雪。彼女もその一人。彼女は精神的要因で喋る事が出来ない。しかし物質を媒体にして自分の気持ちを他者に伝えることができる。大事そうに持っていた熊のぬいぐるみ。あれが彼女のいわば「伝達物質」なのだ。

彼女の真髄はそんなところではないのだけれど。ま、そんなこと

今は関係ない。

それで、今俺の目の前にいる人物。一般人にして、異形の人物。パンドラアパートにいてもおかしくないような人。

俺の知人。駁射苓亮――くくまだらい れいすけ――その人だ。

七年という歳月が彼を変えることはなかった。昔のままのあの人がここにいる。

「いやあ、お久しぶりですね駁射さん。七年ぶりですね。」

「正確に言えば、六年と十ヶ月ぶりだが、まあ確かに久しいな晴辰」
メガネをかけ、七三で、グレーのスーツ。ネクタイはきつと一ミリ単位でズレが生じていないだろう。彼の前に置かれている飲み物も、性格を表しているかのようにブラックコーヒーだ。いかにも堅物そうな人物が俺の目の前にえらそうに座っているのだった。

俺の一番古い友人が座っている。

「いや。この表現は適切じゃないんだっとな。朝黒子ちゃんに注意されたばかりだというのに。進歩が無い俺は」

「黒色は魔女の娘の事か？」

「あれえ、さすが仕事早いですね駁射さん。俺の周辺状況は把握済みですか」

「概ねは。だが決して早いわけでない。お前がこつちに帰って来たのは三年前だろう。わざわざ出向く必要もなかったからな。適当に放置しておいたがそれでも一応の処置だ。三年もあれば十分情報は手に入る。お前が向こうで何をしていたのか、なぜ帰って来たのか。日本で何をやっているのかをな」

淡々と語る駁射さん。

「酷い話ですよ。せっかく愛弟子が帰ってきたというのに。『お帰り』の一言も呟いだなんて」

「弟子をとった覚えは毛頭ない」

「そうですか？俺はいろいろとノウハウを叩き込まれたつもりなんです」

「どのあたりの記憶を美化しているのかは知らないが、私とお前と

の接触は七年前もそれ以前でも数えるほどだろう」

駁射さんは苦々しい顔をした。記憶にないけど、この人はこんな顔をする韃靼だな。

「今こうやってお前と会っているのも、不本意なんだ」

「でしょうね。さすがアルビノさん」

「……その名で私を呼ぶな」

眉間にしわがよっていく。これは懐かしい光景だ。

「なかなか射ていると思いますよ」

アルビノ。それがこの人に課せられてしまった異名だ。普段は決して表に出ることはなく、ただ自分の手足となる部署のそのまた下っ端の組織を使って、この人は生きている。明るみに出てくることなく、自分の手は身は汚さない。ゆえにアルビノ。

「それにほら、実際白いじゃないですか肌が」

眼前の人物は何の反応もしなかった。少し怒らせてしまったらしい。苛立っているのだろうむしろ。

「……本題に入ろう」

長い間が開いてようやく駁射さんはしゃべり始める。

さて、何が飛び出すのかな。

「仕事だ」

「わかってますよ、そのくらい」

俺に限られた時間をさらに切羽詰らせたのは確かだけど、こっちだつてようやく回ってきた仕事なのだ。さつさと聞いて、準備に取り掛かりたい。

「ん、そういえば、私がお前に貸していたガバメントはどこにある。あれ特注だから返してもらいたいのだが」

「って、今度はあんたが話をそらすのかよ」

「無論だ。あれを返してもらうつもりでもあったからな。まさか、もって来ていないのか。だったら、取りに帰ってきてもらつぞ。次会う機会はいつになるかわからないのでな」

「置いてきたのは当たってますけど、太平洋の向こうです」

駁射さんは絶句していた。この表情はレアだ。

「仕方ないでしょう。アメリカに行ったときは駁射さんがチャーターしたプライベートジェットだったから、検問とかなかったですし。帰りは完全に実費だったですから」

「そうか。なら、諦めよう」

意外と諦めが早い人だった。ま、伊達に『アルビノ』なん呼ばれているわけではないのだろう。

「早く仕事の話しましょう。俺もふざけてましたけど、真面目な話し、そろそろピンチなんですよ」

贅沢をしているつもりはないのに、あのアパートに住んでいると何かと出費がかさむ。前回の失敗がさらに拍車をかけている。最後に以来を成功させたのは、三ヶ月前だけど、それだって決して報酬がよかったわけではない。切り詰めて、切り詰めた上で辿り着いてしまったピンチなのだ。

「本当はガスも電気も水道も止まっているはずなんですけど、大家さんに地面にめり込む暗い頭を下げて引き伸ばしてもらってるんですよ。これ以上伸ばしたら笑顔で追い出されます。きつと」

駁射さんなら一日中椅子に座っているだけでも金が入ってくるかもしれないが、俺にとって動かない事は死活問題だ。べつに路上生活が送れないわけではないが、仕事が終わった後に、安息の地に戻れることが俺にとっての生き甲斐だったりするので。

「どんな仕事でも請けますから。とりあえず契約金として家賃ぶんだけでも払ってください。この通り」

目の前で手を合わせてお願いをする。

だけど、必死な俺に引き換え駁射さんは相変わらず無表情だった。そして。

「そうか、請けてくれるのか」と言った。

ん？なんだろうその、ダメもなかったみたいな呟きは。ダメもとなんて、駁射さんにとっては、予定外と同じくらいに嫌いな言葉だ

ろくに。七年間で変わってしまったのだろうか。ここまで変わればむしろ方向転換と言うべきか。

それにしても、悪い予感しかしないのは、気のせいなのかな。

「えーと、請けるといいましたけど、一応内容くらい聞かせてもらってもよろしいでしょうか。いくらか準備が必要ならいったん家に帰らないといけませんし」

考えれば考えるほど、怖気ついてしまいそうだ。

「そうか、請けてくれるか。この仕事はお前にしか出来ないからな俺にしか、出来ない仕事？」

それは、どういうことだろう。俺は主に人助けを中心に仕事を請けているけど、それはべつに俺じゃなくても出来る。つまり普段とは違った趣向の仕事と言うことらしい。

なんとというか、断りたくなってきた。

「仕事の内容というのは……」

俺の心情を完璧に無視してくれて駁射さんは続ける。

「とある少女と同棲してもらいたい」

すでに俺は地雷を踏んでいたらしい。

なんだって？

「はい？」

簡単すぎる説明というのは余計に人を混乱させるもので。聞き取れたはずなのに聞き返してしまった。この色白は今なんておっしやつた？

「監視と言っているかもしれないが」

言い方はこの際どうでもいいや。とにかく、この人の真意を聞きたい。

望みは薄いかもしれないけど、踏んでしまった地雷を撤去できるかもだ。

「何でそれが俺なんですか？ただ見張るだけなら俺以外でも出来るような」

「請けてくれるのだろう。それ以上聞く必要はないと思うが」

「ものすごく悪意を感じます」

「自意識過剰だ。無視しろ」

「やっぱ、駄目っばい。最初からわかってたけど。」

「でもいんですか、少女って。俺も一応男ですよ。たとえば、溜まりに溜まった情欲をその少女にぶつけてしまっても」

「構わん」

「うわー。言っちゃったよこの人。本人差し置いて俺達は何を話しているんだろうか。」

「お前は基本的にその少女といっしょにいてくれればいい。そうであるなら、基本的には何をしてくれてもいい。友達になろうが、恋人にしようが好きにしろ。重要なのはお前が近くにいるということ。それがお前の仕事だ。簡単だろう」

「聞いている内はですが」

「解からないことだらけで、怖さが膨れあがっていることがこの人には伝わらないのか？」

「その少女を監視する理由はなんですか？狙われているのか、少女自身が危険なのかどっちです？」

「どちらも、だな」

「・・・・・・」

これは、難易度が読めないな。

少女自身の危険性は俺にとってたいした意味を持たない。狙われているのであれば、駁射さんのことだ、徹底したセキュリティで守ってくれるだろうから、外に情報が漏れることはおそくないだろう。外に出ることを極力減らせばいい。不平不満を言われようとも、だ。

しかし両方となれば、また状況が変わりそう。危険な人物であるにもかかわらず、狙う。知っていて欲する。なかなか危険だ。

俺ではなく、その少女が。

「だからこそ、お前にやってもらいたい。これはお前にしか出来ない。彼女の性格からして逃げたりしないだろうから、楽なもんだ」

駁射さんは、俺を見据えた。めがねを利き手ではない左手で上げる。それも懐かしい仕草だった。利き手の邪魔をしないための、彼らしい癖。

だから安心する。あの頃と変わっていないこの人を見ることが出来たことに。七年ぶりに頼ってくれる事に。

やってやろうじゃないか。

「いつからですか」

俺は駁射さんに挑戦的な目を向ける。

「お前の準備が整い次第、この場所に向かってくれ」

事務的に、必要最小限のことだけを言っただけを言っただけを駁射さんはメモ書きを渡してきた。まるでワードで書いたかのような字。

「変わりませんね、駁射さんは。あなたは時間の流れぐらいの力では変わらないんですね」

親愛の意を込めて俺は言う。

対して駁射さんは俺にこういつてくれた。

「変わったな」

と。眼鏡の奥の瞳には、鋭い眼光ではなく、やさしい光が宿っていた。

「はじめて見たときは、生意気なガキだった。俺と過ごした六年でお前は少し大人びて、利用されている事を知っているのに、平然としていて。それでもやっぱりガキだった。だが」

目が離せなかった。俺は、この人の目があまり好きではなかったのに。この人の目から逃げるために、アメリカに行く話を一も二もなく受け入れたのに。

今は、それが出来ない。

「そんな、目じゃなかったよ、お前は。濁っていた。嫌なものを見続けて、自分を守るためのフィルターを目に宿していた。それが今ではない。濁りがすっかり取れている。アメリカでのが堪えているのか。」

「家のおかげですよ。家族、でもいい。とある保護者と管理者に俺

は言われたんです。」

憎むなっ

世界を。運命を。人も罪も罰も。楽しく生きようとするだけで、人は力を持てるということを。

「まだ礼賛の情報網もたいしたことありませんね」

「情報はその人が何をしていたかは教えてくれるが、その人が何を感じていたかまでは教えてはくれない」

そういつて、見るからに苦そうなブラックコーヒーを飲み干す駭射さん。この人は味覚まで制御で来てしまうのだろうか。俺にはきつと一生かかっても飲むことが出来ないと思う。

「ま、しっかり働かせてもらいますよ。ほかならぬあなたからの仕事ですから」

「そうか」

眼鏡をかけなおしながら、駭射さんは言う。

「頼んだぞ」

「ええ、頼まれますよう」

それから二人同時に立ち上がり、店の外へ向かう。

それぞれ、別の方向へ歩んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0853s/>

Stand by Killer

2011年4月24日13時40分発行